様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１１１４０

研究課題名（和文）COVID-19診療現場の看護師が抱える心理的負担の要因

研究課題名（英文）Factors of psychological burden faced by nurses working in COVID-19 patient wards

研究代表者
坂本　陽子（Sakamoto, Yoko）

岡山大学・大学病院・助教

研究者番号：８０８４５８１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、パンデミック初期におけるCOVID-19感染者対応に対する看護師の不安や課題を明らかにすることである。岡山県の自記式アンケートを基に、看護師159人の自由記載全文をKHcoderで計量テキスト分析した。受け入れ、課題、提案の3項目について形態素分析を行い、頻出単語150語を抽出、共起ネットワークとクラスターを描画した。勤続年数による使用語句の差異も解析した。結果、受け入れには不安と不満が強く、勤続年数により意見が異なることが示された。課題では部所ごとの感染対策の差異やメンタルヘルス対応の必要性が浮上し、提案ではメンタルヘルス支援や現場の意見を聴く機会の増加が求められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究の学術的意義は、COVID-19パンデミック初期における看護師の心理的負担や課題を定量的に分析することで、看護現場の実態を明らかにした点にある。特に、形態素解析や共起ネットワーク分析を用いることで、看護師の経験や感情を詳細に把握し、勤続年数による意見の違いを明確に示したことが新規性を持つ。社会的意義としては、本研究結果を基に、今後のパンデミックや緊急事態における看護師支援策の改善に寄与する点が挙げられる。特に、メンタルヘルス支援や現場の声を反映した対策の重要性が示されており、これにより看護師のストレス軽減や働きやすい環境整備が期待される。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the anxieties and challenges faced by nurses in dealing with COVID-19 patients during the early stages of the pandemic. Based on a self-administered questionnaire conducted in Okayama Prefecture, we performed quantitative text analysis using KHcoder on the free-text responses of 159 nurses. We focused on three main items: acceptance, challenges, and proposals. We conducted morphological analysis to extract the top 150 frequent words and created co-occurrence networks and clusters. We also analyzed the differences in word usage by years of service. The results indicated strong anxiety and dissatisfaction regarding acceptance, with opinions varying by years of service. Challenges highlighted differences in infection control measures across departments and the need for mental health support. Proposals called for increased mental health support and opportunities to hear the opinions of frontline staff.

研究分野：公衆衛生学

キーワード：COVID-19　看護師　ストレス要因　メンタルヘルス　計量テキスト分析　KH Coder

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的なパンデミックは、専門家を含め、多くの医療従事者に前例のない医学的・社会的影響を及ぼした。治療法も限られ、予防法も確立していなかった当時は、新型コロナウイルス治療の最前線で働く医療従事者のメンタルケアが課題になっており、海外では、不安や鬱症状など精神保健上の問題が発生していると報告されている。特に若い年代の女性看護師はリスクが高いとされている。

本邦においても、パンデミック初期は情報が錯綜し、陽性患者のケアにあたる看護師の負担が大きかったことが推察される。感染の流行は、衛生材料等物資不足、労働環境の悪化、自身の感染への不安、看護職員への差別・偏見など、看護界が近年経験したことのない事態を引き起こし、COVID-19 患者受け入れ病棟で働く看護師にとって、大きな心理的負担の要因となっていた。しかし、その要因について科学的に検討された報告はない。これらの実態を明らかにすることは、看護師のメンタルヘルスケアの改善、および今後の感染拡大に対応できる医療体制を確保するために重要である。

２．研究の目的

本研究の目的は、COVID-19 患者受け入れ病棟で働く看護師へのアンケート調査の結果を分析し、現場の看護師が受ける心理的負担の要因を明らかにすることである。

３．研究の方法

本研究では、COVID-19 患者受け入れ医療機関の病棟で働く看護職員に配布した自記式アンケート調査の資料を二次利用した。2020 年 7 月に県内の 9 つの医療機関に対し自記式調査票を送付し、約 2 週間の調査期間で回答を得た。アンケートの質問内容のうち、以下の 3 項目に着目した。

① 受入：コロナ陽性患者を受け入れることについて
② 課題：課題・改善が必要だと感じたこと
③ 提案：今後に向けての提案

形態素分析には MeCab を使用し、テキストマイニングには KH Coder（ver.3 Alpha.15c）を用いた。使用辞書は標準辞書とし、機能語を除く頻出単語の上位 150 単語を抽出した。さらに、共起ネットワークを作成し、出現パターンの似通った単語の組み合わせを示した。対応分析では、勤続年数による使用語句の差異を図示した。

４．研究成果

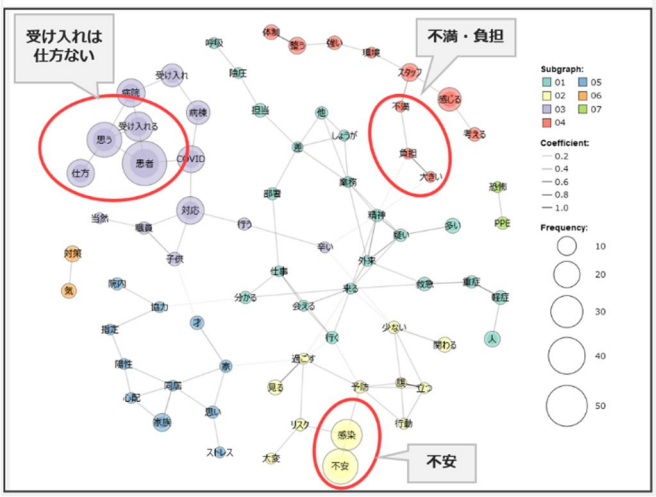
1） 結果

有効回答者数は 109 人であった。
対象者である看護師の特性は表 1 に示す。
①の上位頻出単語と頻度は「患者 59」「不安 37」「思う 36」「感染 28」「受け入れる 25」「仕方 22」「対応 22」「COVID 21」「感じる 16」「病棟 16」「看護 15」「自分 15」であった。
①の共起ネットワークを図 1 に示す。

表1　対象者（看護師）の特性

		n（109）	%
性別	女性	97	(89.0)
	男性	12	(11.0)
勤続年数	5年未満	30	(27.5)
	5-9年	33	(30.3)
	10-19年	36	(33.0)
	20年以上	10	(9.2)
管理職	管理職	13	(11.9)
	管理職以外	95	(87.2)
	回答無し	1	(0.9)

図1　①コロナ患者受入れに関する自由記載の共起ネットワーク



②の上位頻出単語は「患者 18」「対応 16」「スタッフ 15」「COVID 13」「思う 13」「病棟 13」「必要 12」「看護 11」「病院 11」「感染 10」「人 10」「入院 9」「家族 7」「感じる 7」であった。②の共起ネットワークは図２に示す。

③の上位頻出単語は「COVID 19」「患者 18」「対応 15」「スタッフ 13」「思う 13」「病棟 11」「看護 7」「検査 6」「考える 6」「人 6」「入院 5」「PCR4」「アンケート 4」「情報 4」「ローテーション 4」であった。③の共起ネットワークを図３に示す。

図2　②課題・改善に関する自由記載の共起ネットワーク

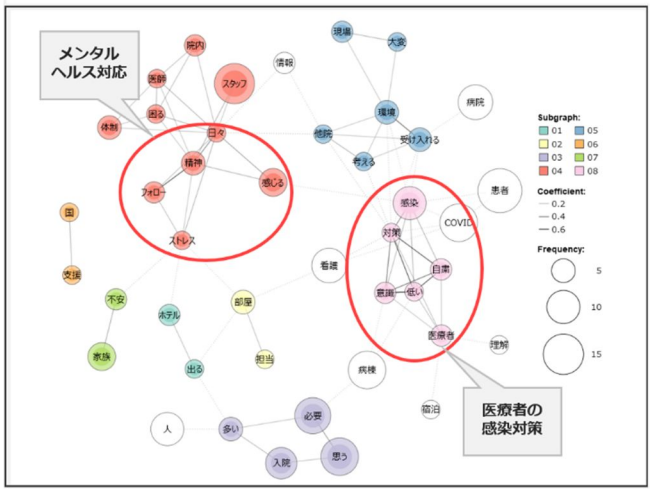
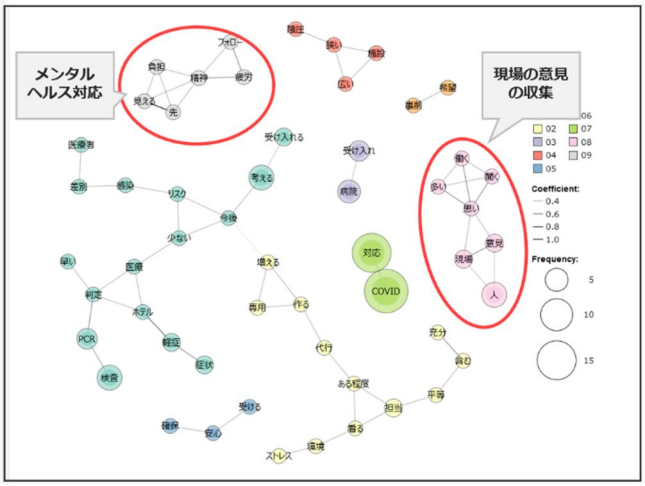


図3　③今後の提案に関する自由記載の共起ネットワーク



最後に、①②③について勤続年数別の対応分析の結果を図４，図５，図６に示す。

図4　①の勤続年数別の対応分析の結果

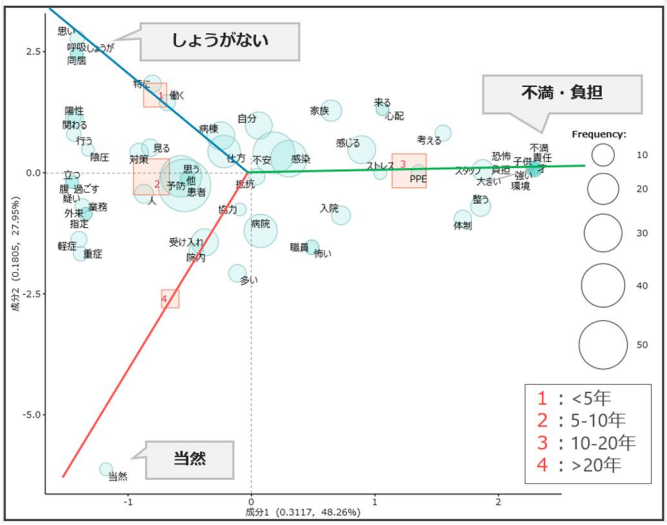


図5　②の勤続年数別の対応分析の結果

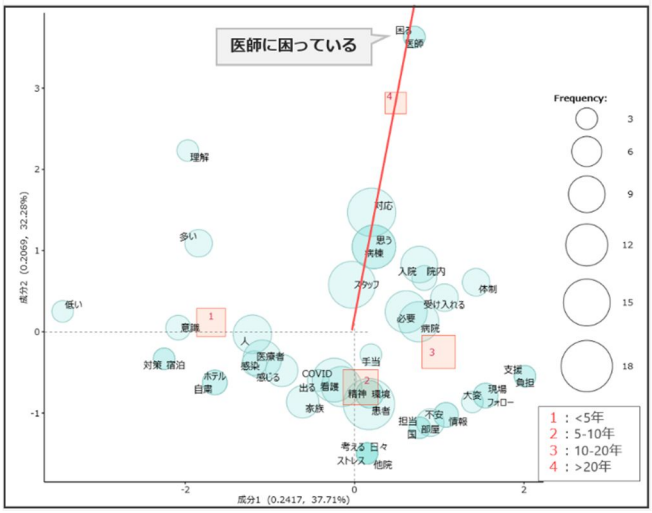
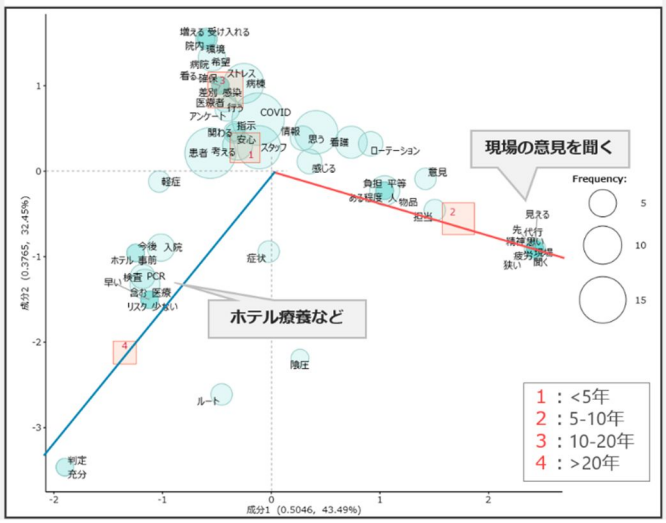


図6　③の勤続年数別の対応分析の結果



2） 考察とまとめ

本研究では、パンデミック初期の COVID-19 患者を受け入れることに対して、看護師の不安や不満が強かったことが示された。勤続年数によって意見には違いが見られ、勤続 5 年未満の看護師は「しょうがない」という意見が多く、勤続 10-20 年の看護師は「不満・負担」が強く、勤続 20 年以上の看護師は「当然」という意見が多かった。このことから、COVID-19 患者への看護対応において、看護師が担う役割や経験によって感じる負担や意見が異なることが示唆された。

また、課題として、看護師のメンタルヘルス対応が必要であることが明らかになり、当時は COVID-19 に対応していなかった医療者の感染対策が不十分であったことが示された。特に勤続 20 年以上の看護師からは「医師に困っている」との記載が見られ、医師との協力や連携の改善が求められる。

今後の提案として、看護師のメンタルヘルス対応や現場の意見を聴く機会を作ることが重要であると提案されている。これらに対処することで、看護師のストレスを軽減し、現場のニーズを反映した効果的な対策を講じることが期待される。

なお、本研究は感染の最初期におけるアンケート調査であったため、第 7 波まで乗り越えた現状とは異なる意見も含まれている可能性がある。将来のパンデミックにおいては、メンタルヘルス対応や現場の意見を聴取し反映する場を設けることが必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 三橋利春
２．発表標題 COVID-19に対応した看護師の不安要因および看護上課題の探索：自由記述アンケートの計量テキスト分析
３．学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三橋　利晴 (Mithuhasi Toshiharu) (30716890)	岡山大学・大学病院・助教 (15301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関